Nakata vs Cubase

中田ヤスタカが語る、サウンドプロダクションの方法論と、これからのサウンド

プロデュースしている「Perfume」が大ブレイクし、今や日本の音楽シーンで最も注目を集めているプロデューサー／サウンドメーカー、中田ヤスタカ氏。自身のユニット「capsule」では曲作りからアレンジ、ミキシング、マスタリング、さらにジャケットのアートディレクションまでもほぼ一人でこなしてしまう巨大な才能の持ち主だ。音楽制作のすべてを行うというプライベートスタイジオで、サウンドメイキングについて、愛用のCUBASE4について、そして音楽制作のコンセプトについてインタビューした。

最後まで『より良くしたい』から、歌を録りながら作曲もアレンジもしています。

■中田ヤスタカさんのサウンドプロダクションのプロセスを教えてくれますか。

●他の人と結構違うかもしれませんが、僕は早い段階で歌を録っちゃうんですよ。声を録ってからアレンジを考えたり作曲もします。録りながらアレンジしている感じですかね。だから歌入れでアイディアがわいたら、ボーカリストに待ってもらってアレンジの作業に入ってまた歌入れに戻る、という繰り返しも。あまり作り込まない時点で歌を録り始めます。

オケを作ってから最後に歌を入れる方法だと「一か八か」にしかならないんですよね。最後の歌入れで「あれ、なんか歌えてないな」という時はボーカリストにディレクションしてオケにあわせてもらうしかないじゃないですか。そうじゃなくて、制約無く好きに歌ってもらった時の感じを生かしてアレンジしていきます。だから、レコーディングに入ったときの音と完成したときの音が全然違う。コード進行も全然変えちゃいます。最初からリミックスされているような空気感ですね。

■自分でも完成は見えないけど作り続けていく？

●これ以上良くするにはどうすればいいんだろうということを、時間がある限り限界まで考えたいんですよ。

■歌を録ってからどんどん曲を変化させていくのは、DAWだからできることですね。

●最後の最後にAメロをヤメてしまう、というように、構成も最後に考えるのでDAWでないと僕の音楽制作のスタイルは無理です。

Cubase4で、MIDIもオーディオも意識しないで使っています。

■DAWはCubase4をお使いですね。

●以前はADATだったり、デジタルパフォーマだったりしましたが、2002年頃にオールCubaseに移行しました。最初はVSTのソフトシンセが使いたかった、というのが理由ですが、オーディオを扱うのがカンタンになったのもあって。今はMIDIもオーディオも意識しないで使ってます。単純に素材がいっぱい並んでいる感じ。時々間違えるんですけどね（笑）。

■DAWになって制約が無くなった感じはありますか。

●音で考えたら制約はもうないですね、あとは作り手の感性がどれくらいあるかでしょうね。

ピアノの音の強弱を表現するのにはMO8のピアノタッチ鍵盤がいい

■スタジオにはMO8とKX61がセットされていますね。

●MO8はピアノタッチ鍵盤として、主にピアノやエレピを弾く時に使ってます。ピアノを弾いていたこともあり、やっぱり実際に重い鍵盤を使った方が強弱が付けやすいですね。軽い鍵盤だと中くらいの上とか、中くらいの下の弾き分けが難しい。KX61はメインで使用しています。いままで49鍵のものをつかっていましたが、少し足りないと思っていて、音域が広い鍵盤にしました。PCを操作しながらだと、これくらいの大きさがいいですね。

■音源はすべてソフトシンセですか？

●そうです。僕はもうソフトシンセの方が音がいいと思っています。それとハードのシンセが部屋あると「そのシンセを使おう」と思うことが自分の縛りになってしまうのがNG。ギター買ったからロックやんなきゃいけないみたいな？　ソフトシンセは必要なものが必要なときスッと出てきて、使ったらまたなくなる、という感じが気に入ってます。音源としては割とシンプルなものが好きで、1音でいろんな音が出てエフェクトがついているようなハイブリットなものは僕は要らない。音が一個一個ウザいという感じです。音楽の素材として使いやすい音、曲の中で使える音は結構シンプルな音なんですよ。

勘違いや偶然から生まれた新しい音やバランスが、いま面白い。

■　DAWを駆使することで、自分の部屋で録音、ミックス、マスタリングまで全部できる時代ですが、音楽は変わってきているのでしょうか。

●いまみんなが「プロっぽさ」みたいなものをヤメたがっているんじゃないかと思います。以前だったらエンジニア的には「失敗」だったのが逆にカッコよかったりする。まだ卓でミックスしていた12、3年くらい前までは、みんなが目指す「プロっぽい音」があった。でもPCでミックスまでできるようになると、知識がなかったり、勘違だったり、偶然そうなっちゃったみたいな音から、新しい音やミックスバランスが生まれてきて、今はそれが面白いと思ってます。でも僕なんておとなしい方だと思いますよ、海外のエレクトロの音なんて、全然歪んでますからね。耳痛いもんね。フィルター上げてレベルが赤くついても、そのままいっちゃえ！　みたいな。でもエレキギターのディストーションだって、最初の頃はNGだったのが、だんだんあの歪みがいいということになったじゃないですか、それと同じだと思います。だから僕はデジタルの歪みが好きだし、MP3で圧縮しすぎてシャリシャワした音もカッコいいと思っています。そういう時代は絶対来るから。

「ダサい」と「カッコいい」のギッリギリのところをやりたい。

■いまほしい中田さんがほしいシンセはどんなシンセですか？

●デザインのいいシンセですね。音楽をやりたい人の入門用のシンセはあるんですが、音楽に興味のない人が「これカッコいい」って弾きたくなるシンセがない。たとえばiPodがほしい人って「音楽が聴きたい」よりも先に「iPodを持ちたい」っていうのがあると思うんです。でiPod買ったら音楽も買わなきゃって、それが音楽の売り上げに貢献している面もある。ハードがソフトを助けてくれるみたいな。同じように作曲家を増やすなら、カッコイイ楽器を作れればいい。「自分の部屋にこういう物を並べたい」っていうイメージから打ち込みをはじめた人も多いと思うんです。パソコン買ったら買わなきゃって思うぐらい、カッコいい鍵盤があっても面白い。すこし高くてもみんな買うかもね。僕がやりましょうか（笑）。

■シーンの最先端を走っている中田さんですが、これからどんなことをしたいですか？

●流行のない時代だから、なんでもできると思うんです。たとえばシンセドラムの音とか「いま、アリ？」みたいな、「ダッセー、でもちょっとカッコイイじゃん」って思う自分がいるんです。やりようによってはもの凄くダサいけど、やりようによってはもの凄くカッコいいかもしれないっていう、そのギッリギリのところをやりたいんです。感性とか価値観とかをちょっとずつ変えていく、そんなきっかけになるような。それから自宅で録音するっていうスタイルって閉鎖的でない感じ、ちょっと内側っぽいイメージですけど、これからは暴れているイメージを持ってもらえるようなパワーみたいなものを出したいんですよね。

■中田さんに憧れて音楽を作っている人がたくさんいると思います。最後に彼らにメッセージをお願いします。

●同じようなスタイルで全然違うジャンルの音楽をやってくれたら、ぜひ聴きたいです。自分が「アリ」と思ったら周りが不安になってもいい、っていうスタイルを、いろんなジャンルでやったら凄く楽しいと思うんです。ジャンルに縛られる人が多すぎるんですよね。バンドなら「ナマじゃなきゃいけない」とか。スネアやキックに音を重ねてもいいと思うんですけど、そういうことを考えられるかどうか。作り手に「やってはいけない」前提なんてないです。作り手なら、たとえばクラシックを聴いていて「なんでここにキックが入んないの」って思っていいんです。「ナシ」を考えるんじゃなく「アリ」を考える。核心は「自分がそれを本当にカッコイイと思えているか」ってこと。周りの人に認めてもらうための方法論だったりするとダメ。いままであった何かが「本物」で、それに似せて「ああ、やっと本物になった」って、考えるのは音楽が停滞してしまいます。だって「本物」ってのは前の何かってことだから。そんな本物だったら、要らないよね。

『Cubase Essential 4』好評発売中!

Cubase Essential 4は、前モデル「Cubase SE 3」の後継として開発されたCubaseシリーズのエントリー・グレードです。中田ヤスタカ氏も使用されているCubaseシリーズのフラッグシップ・グレードである「Cubase 4」と同様の高音質VST3 オーディオ・エンジンをベースとしており、音楽制作用途として必要不可欠な機能に絞り込むことでハイコストパフォーマンスを実現しました。ヤマハのハードウェア・シンセサイザ「MOTIF」の波形を採用した音源「HALion One」、オーディオ&MIDIデータ、音源&エフェクト・プリセットなどを一括管理する「メディアベイ」、素早く異なる曲構成を試すことができる「アレンジャートラック」、オーディオファイルのテンポをプロジェクトテンポに自動追従させる「オーディオワープ」などの新機能を多数搭載しています。リーズナブルな価格でCubaseの基本機能をお求めの方に是非お勧めしたいソフトウェアです。

steinberg
Creativity First

Cubase Essential 4 通常版
市場実勢価格:¥25,800（税込み）
Cubase Essential 4 アカデミック版
市場実勢価格:¥21,000（税込み）
Cubase Essential 4 アップグレード版
市場実勢価格:¥16,800（税込み）

Cubase Essential 4 製品情報WEBページ
http://www.steinberg.net/1619_0.html

BREAKING NEWS

A.R.Eを施した新しいLシリーズの記者発表には加藤和彦氏も駆けつけ、そのサウンドを絶賛。

あのLシリーズがA.R.E技術で「新品なのにビンテージギター!」

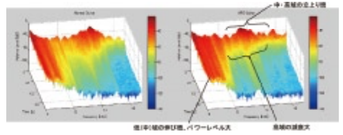
ヤマハアコースティックギターを代表する高級モデルLシリーズの高級手工シリーズの「L36」および「L26」シリーズに、独自の木材改良技術「A.R.E」を施した素材を用いた「L36ARE」、「L26ARE」の2シリーズが発売。「A.R.E」によって、完成後20年から30年ぐらい弾き込まれたビンテージギターに近い、熟成された暖かみのあるサウンドを実現しています。ギター好きのあなた、高価なビンテージギターに憧れていたあなた、ぜひ楽器店で実際の音をお確かめください。

LS36ARE

WHAT is A·R·E

A.R.E.技術とは何か?

A.R.E. [Acoustic Resonance Enhancement]とは、長年弾き込まれたような豊かな鳴りを実現する木材改質技術。高度に制御された水と熱のみを利用し、木材の物性を音響的に理想的な状態[=長年使い込まれた楽器の木材の分子構造と同様の状態]へコントロールするものです。掲載のグラフは、現行品Lシリーズと A.R.E.搭載のNew Lシリーズを一定の条件下において発音させた、音響スペクトルの実測グラフィックデータ。低域のサステインが増大し、高域のアタック感が良くなっています。またアタックの後、耳障りな高域成分がより短時間で減衰して聞こえる。多くのミュージシャンからも「落ち着いた」、「熟成された」、「暖かい」、「（箱）鳴りの良い」、「（音の）粒立ちが良い」といった評価を得ています。



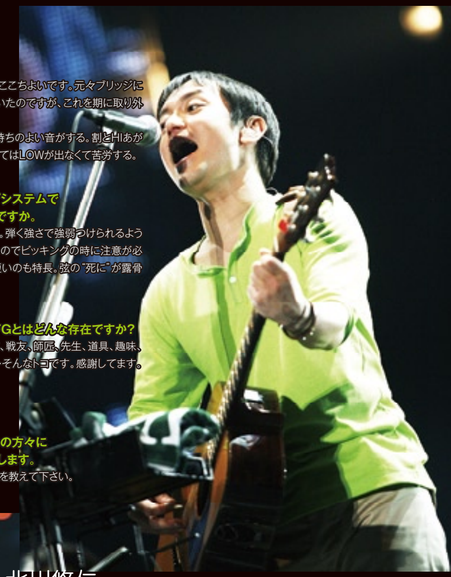
DE1155　　ヤマハ株式会社

YAMAHA Vol.1 LIVE NEWS
Interviews & News of Excellent musicians collaboration with YAMAHA musical instruments products.
2008 May 20th

ゆず Playsヤマハアコースティックギター

in YUZU ARENA TOUR 2008 WONDERFUL WORLD

4月16日に、2年3ヶ月ぶりのオリジナルアルバム『WONDERFUL WORLD』をリリースした、北川悠仁と岩沢厚治のフォークデュオ「ゆず」。「YUZU ARENA TOUR 2008 WONDERFUL WORLD」でツアー中の2人に、ヤマハギターについての質問に答えてもらった。



4 ゆず 岩沢厚治 Qustions & Message

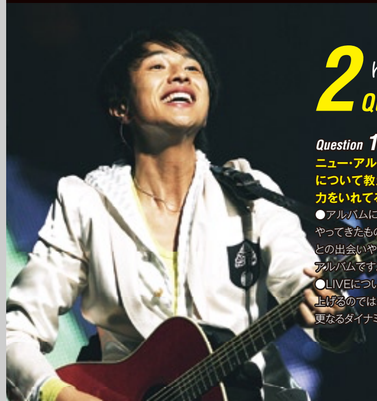
Question 1
ヤマハのアコースティックギター「FG」で気に入ってる点はどこですか。
手になじむところ。にぎりやすさ。海外の有名ギターにはない和製の音が好きです。初めて手にしたのがFGで、それ以外をあまり使っていなかったので。

Question 2
持っているFGの特徴や音の違いは?
FG730ST: 13歳の誕生日に父親に買ってもらったギター。地元の楽器店で買いました。15歳から今まで使ってます。今は家用ギターとして使用中。そろそろメンテナンスが必要です。
白1（FG-Custom）: 一度ネックが折れるという大けがからみごと復活。にぎりやすく、ストロークからアルペジオまでほぼ広く使用。ピックアップは旧型で、シャキっとした音がこどもよいです。
白2（FG-Custom）: 1号機と同じ型の2号機はピックアップをA.R.Tピックアップに変更。より生に近い音が出る。弦高が低いのでアルペジオや指弾きの時の独特なビビリがよい。割とクリアな音がする。
黒1（500X）: 元々ピエゾだけだったピックアップをA.R.Tに変えました。元々鳴っていたLOWがより出るようになりました。MIDもここちよいです。元々ブリッジにアジャスターがついていたのですが、これを期に取り外してもらいました。
黒2: ジャカジャカと気持ちの良い音がする。割と明あがりな設定で、会場によってはLOWが出なくて苦労する。

Question 3
A.R.T.ピックアップシステムでよくなった点はどこですか。
音。より生に近くなった。弾く強さで強弱つけられるようになった。生々しく出るのでピッキングの時に注意が必要。サステインが割と短いのも特長。弦の「死に」が露骨に出る。

Question 4
岩沢さんにとって、FGとはどんな存在ですか?
相棒、家族、親戚、親友、戦友、師匠、先生、道具、趣味、オブジェ、携帯、荷物…そんなトコです。感謝してます。好きです。

& Message
ギターを愛する読者の方々にメッセージをお願いします。
ギターがうまくなる秘訣を教えて下さい。



2 ゆず 北川悠仁 Qustions & Message

Question 1
ニュー・アルバム『WONDERFUL WORLD』について教えてください。また、ツアーの見所、力をいれてる点は?
●アルバムについて。デビュー11年目を迎え、今までやってきたものは更に強固に大切にしつつも、多くの方との出会いやチャレンジをし、新たなるゆずを表現したアルバムです。
●LIVEについては、足し算ではなく引き算。足して盛り上げるのではなく、あえて引いてみる事で、音も演出も更なるダイナミックスと広がりを作っている所です。

Question 2
アコギとはどんな存在ですか?
恩人みたいな存在です。

& Message
ギターを愛する読者の方々にメッセージをお願いします。
まだまだ未熟者ではありますが、「もっと上手くなりたい!!」の気持ちを大切に精進していきたいと想います。お互い楽しみながらGood playしましょうね!!

See Next Page!

ゆずの舞台演出笹川章光氏が語る、ゆずサウンドの秘密

ゆずのライブにおける総責任者である舞台演出の笹川章光氏は、
ゆずのライブサウンド作りのキーパーソンである。
笹川氏に、ゆずのアコースティックギターのサウンドの秘密と、
新開発のA.R.Tピックアップについて語っていただいた。

岩沢君はこよなく愛するFGに A.R.Tというエンジンを載せた。

■岩沢さんは、デビューから音の面でゆずを支えていらっしゃいますが、岩沢さんはどうしてずっとFGを使っているんだと思われますか?

●岩沢君は最初からヤマハ弾いてましたが、ゆずが最初のツアーをやる頃に「ギターが足りない」いう話になって、ガンちゃん(岩沢さん)がウチの事務所に来て。ちょうどそこにヤマハの黒いギターがあって、ガンちゃんは、そのギターですっかりヤマハにのめりこんでいった。出逢っちゃったってことじゃないですかね。それが今、彼が使ってるクロ1というギターです。

■岩沢さんはどのギターでも使える状況だと思いますが、それでもFGなんですね。

ガンちゃんはそういう人ですね。彼は自分のFGをこよなく愛しているから。今回もギターの出音をもっと良くしたい、ということになって。彼は「エンジンを載せ替える」と言って、今のFGにA.R.Tを取り付けることにしたんです。新しいギターに乗り換えるんじゃないんですよ。新しいギターにしたら、って言っても、目もくれない。「俺はヤダ」って。あそこまで自分のギターにこだわっている人は珍しいですね。

北川君は今回ヤマハのプロトタイプの赤いアコギを使ってます。

■北川さんというとピアニカ吹いてる姿が思い浮かびますね。

●北川君はよくピアニカを使います。彼が「スケルトンってない?」って言ったので探したらヤマハにあって、それをその凄く気に入ってるようです。

●それから今回のツアーで北川は、ヤマハのプロトタイプのアコースティックギターを使っています。赤い色のギターです。ピックアップはA.R.T。それから今回ツアーでは使っていませんが、北川はヤマハの「ドラゴンギター」を持ってましてね。それはジョン・レノンがヤマハで作ったギターのレプリカですが、実は作るにはオノ・ヨーコさんの許諾が必要なんですね。普通は許可を取るのは難しいんですが、以前ゆずが「Dream Power ジョン・レノン スーパー・ライヴ」に出演したことがあって。その縁でオノ・ヨーコさんに打診したら快諾をいただいて作れることになりました。彼は宝物のように大切にしてるようです。

新開発のピックアップシステム「A.R.T」はかなり生っぽい音が出せます。

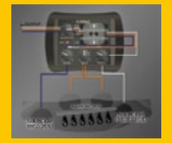
■「A.R.T」ピックアップについて聞かせてください。

●僕は従来のピエゾ方式のピックアップでもアコースティックギターの80%はOKだと思ってます。ただ、あとの20%の「生っぽさ」をどう表現するかについて、10年近く試行錯誤してました。で、あるときヤマハからコンタクトマイク方式の開発の話があって。これはかなり生っぽい音が出せそうだということになり、いっしょに研究を始めたんです。何度もトライしたおかげで、かなり生っぽい、いい音が出せます。

A.R.Tではマイクだけでなく、プリアンプの調整にも時間をかけました。特にアコースティックギターは中域が大事で、いちばん美味しい音域であり、難しいところでもあります。そこも含めて音質の精度を高めたことで、PAがほとんど音をいじらなくてもいいすでに「いい音」ができました。いままで我々の課題だった「PAでギターの音が変わる」ということが回避でき、誤差の少ない安定したピックアップシステムに近づけたと思います。

A.R.Tピックアップシステムとは

『Acoustic Resonance Transducer(アコースティック レゾナンストランスデューサー)と新開発の3ウェイピックアップで、独自の積層構造とセッティングとの組み合わせによって高音質な電気増幅機能とハウリング耐性を両立させた画期的なシステム。ブリッジの中央にアコースティックサウンドの基幹部分を担うメインピックアップ、1弦と6弦のそれぞれの裏側周辺に高音域用と低音域用のサブピックアップの計3系統のピックアップを搭載しています。



伝説は、進化をやめない

Lの遺伝子を受け継ぐ「ヤマハ FG/FSシリーズ」

1966年のFG180/FG150の登場から40年。FG/FSシリーズは常にその進化の足を止めず、赤ラベルをはじめとした数々の名器を世に送り出してきました。2007年のFG/FSラインナップには、最高級カスタムモデル"L"シリーズの開発で生まれた数々の新しい技術やアイディアが継承され、弾き易さと鳴りの良さが一段とアップしています。ヤマハオリジナルボディでタイトでクリアなサウンドを持つFGシリーズ、コンパクトなボディながら充実の音圧・音質を誇るFSシリーズ。コードストロークでもフィンガーピッキングでも、ギターの魅力を存分に味わうことのできるギターです。

FG750S
¥54,600(本体価格 ¥52,000)

FG720SL
¥42,000(本体価格 ¥40,000)

FS720S
¥36,750(本体価格 ¥35,000)

「FG/FS トライ&プレイ」キャンペーン(キャンペーン期間:2008年5月3日〜2008年7月31日まで)
対象店にてFG/FSシリーズをお買い上げのお客様に、オリジナルヤマハストラップ(タフな3mm厚合皮製)をもれなくプレゼント。※数量限定、無くなり次第終了予定。

Akira Jimbo Plays DTXREME III

At 神保彰ワンマンオーケストラ　ドラムからくり全国行脚2008

僕とDTXTREME IIIは、もうバンドメンバーみたいな関係です。

1980年カシオペアでプロデビュー以来、
四半世紀の長きにわたって常に音楽シーンの最先端を走り続けるトップドラマー、神保彰。
ニューズウィークの特集「世界が尊敬する日本人100人」に選出されるなど
名実共に「世界で最も有名な日本人ドラマー/ミュージシャン」である。
ドラムトリガーシステムDTXTREMEIIIによるワンマンオーケストラは
まさに神業の域に到達していると言えるだろう。
現在「神保彰ワンマンオーケストラドラムからくり全国行脚2008」と題して
80都市82会場を巡るツアー中の神保氏にインタビューした。

ドラム1台でコンサート。もう11年、このスタイルでやっています

■ワンマンオーケストラをはじめたきっかけを教えてください。

●僕はデジタルドラムが出た早い時期からにメロディックなアプローチをはじめました。最初はヤマハの電子ドラムのPMC1でした。PMC1には打楽器なのに音階が出せてメロディックな実験ができる機能がついてた。で、ドラムソロの中で音階を使ってみたら、もの凄くウケたんです。これはイケる!　そういう単純な発想で始まりました。そこから世代が変わるごとにどんどん機能が強化されて、複雑なことができるようになってきて。このツアーのように2時間のコンサートを僕一人でやるようになったのが1997年からですから、もう11年、このスタイルでやっています。

■ドラマー1人で音楽全部を演奏するのは大変ですよね。

●確かにドラマーとしての力量はもちろん、ある意味アレンジなども含めてプロデューサーとしての視点も必要なので、すごしハードルは高いかもしれません。でも非常にチャレンジしがいのある未開の分野なので、いろんなドラマーにトライしてもらいたいですね。

僕はこのツアーでカバー曲をたくさんやっているんですが、カバー曲を違った視点で自分ならのアレンジで見せるというのができるようになってきました。曲に対するアレンジ能力とか、自分の曲のアンサンブルの組み立てなんかも格段にスキルアップしたんじゃないかな、と思っています。今回のワンマンオーケストラは、カバーが多いんですよ。60年〜80年のロックメドレーや、アース・ウィンド・アンド・ファイヤーのメドレー、ウェザー・リポートのメドレー、それにクラシックのメドレーもあります。いろんなジャンルでいろんな世代の方に楽しんでいただけるような曲をピックアップして、僕ならの「ひねり」を加えたアレンジで聞いていただいています。

DTXTREMEIIIという機動力が、このツアーを可能にしています

●「神保彰ワンマンオーケストラ　ドラムからくり全国行脚2008」では日本全国の多くの会場をツアーなさってますね。

■去年から大規模な国内ツアーをはじめました。去年が40会場くらい、今年は80都市82会場です。非常に多いと思いますが、これができるようになったのは、やっぱり駆動力なんですよ。バンドで動くと、スタッフを入れても最低でも4人、5人の動きになりますが、このツアーは僕とドラムテックの枝川くんとの二人だけ。彼と僕とヤマハドラムとDTXTREMEIII。これでどこにでも行けるという機動力を手に入れたのは大きいですね。このツアーは360度全方向に客席を設けるようにしていて、本当に数十センチの近さでお客様に聞いてもらっています。そういえば僕のコンサートはなぜか後ろから埋まっていく感じです。ドラマーは後ろから見たいんですね。

神保彰ワンマンオーケストラ　ドラムからくり全国行脚2008　ツアースケジュール

6月9日	(月)	○札幌　ヤマハ フィールズ	6月24日	(火)	三重　MAXA
6月11日	(水)	水戸　Gari Talk	6月25日	(水)	和歌山　OLD TIME
6月12日	(木)	○横浜　KAMOME	6月26日	(木)	○大阪　knave
6月13日	(金)	ヒダランボ	6月27日	(金)	○京都　RAG
6月19日	(木)	富士　KOLN	6月28日	(土)	滋賀　ホテルラフォーレ琵琶湖　デジタルスタードームほたる
6月20日	(金)	○浜松　Merry You	6月29日	(日)	○大阪　茨木市　JACK LION
6月21日	(土)	豊橋　HOUSE OF CRAZY	6月30日	(月)	土岐　Brid & Diz
6月22日	(日)	○名古屋　Bottom Line Japan	7月1日	(火)	甲府　桜座
6月23日	(月)	奈良　BEVERLY HILLS	7月2日	(水)	高崎　Club FLEEZ

○印の会場ではDTXTREMEの試奏が行えます。

DTXTREMEIIIとの演奏は、一人なのにバンド的。

■やはりワンマンオーケストラのカギはDTXTREMEIIIでしょうか。

●その存在は僕にとって非常に大きいですね。ドラマーが一人で演奏するというのは、ある意味孤独なんですが、DTXTREMEIIIとの演奏は、全部の音をパッドを叩いて音をだしているので「自動演奏」じゃないんですよね。たとえば自動車に乗るのがシーケンサーやカラオケを使った自動演奏だとすると、DTXTREMEIIIとの演奏は自転車のようなもの。自分が何かしないと音楽が動いてくれないんです。

■自転車みたい、というのはオモシロイですね。

●自動演奏じゃないから、いつも同じ演奏にはならないんです。ツアーで何回も同じ曲を演奏しているとだんだん演奏がこなれていくんですよ、これが非常にバンド的なんですね、一人なのに。アレンジも臨機応変に変わってくる。その日の気分でテンポもかなりかわります。意識的に速くやると面白いなと思った時期があったり、遅くやると新鮮だなと思った時期があったり。80本のツアーの中でも変化があります。

格段に進化したDTXTREMEIIIでパフォーマンスの制約が無くなった。

■神保さんはDTXTREMEIIIの開発にも深く関わられたそうですね。

●DTXが出てきたあたりから、僕がワンマンオーケストラで演奏していて「どうやったらもっと簡単に、一般の方に楽しんでいただける音楽が演奏できるか」という面から発想して「こんな機能があったらいい」と言い続けてきました。今回のDTXTREMEIIIでは現時点でのリクエストは全て実現していただきました。でも「言うは易し」ですからね、開発者の方はかなり苦労されたと思います。

■DTXTREMEIIIではどんな機能が特長ですか

格段に進歩したのが、スタック・オルタネイト機能ですね。スタックは和音を出す機能。オルタネイトはプログラムする順番に単音が出てくる機能。前までは「スタックは6音まで、オルタネイトは9音まで」というような機能的な制限があって、それ以上はどうやっても無理でした。それがDTXTREMEIIIからは基本的には無制限にプログラムできます。たとえば極端に言えばベースラインなら1曲分のベースラインもそのまま入れることができるわけですから、今までとは比較できないほど拡張してます。本当に制約がなくなりました。DTXTREMEIIIのプリセットには僕がプロデュースしたキットの音も入ってます。DTXTREMEIIIのプリセットには僕がプロデュースしたキットの音も入ってます。No.9、19、29ですので、ぜひ僕の音を展示会場や展示店で試してみてほしいと思います。

ヤマハのドラムは「ハイレスポンス」力量がそのまま音にでるところがいい。

■ヤマハのアコースティックドラムについて、聞かせてください。

●僕はなんといってもスティーブ・ガッド世代ですから、学生時代からずっとドラムと言えばヤマハでした。ヤマハドラムは時代を超えたスタンダードだと思います。ヤマハの良さを言葉で言えば「ハイレスポンス」。プレイヤーのプレイアビリティを如実に反映してくれる楽器ですね。誰が叩いても同じ音がするのではなく、叩く人が変わると、音も変わってくる、そこが傑出していると思います。それはシェルの精度、ハードウェアの精度とかが音に反映されている。ヤマハのドラムは非常に繊細に作られているからでしょうね。

■今後のスケジュールを教えてください。

●去年から自分のソロアルバムをはじめました。昨年のアルバム『Four Colors』、今年のアルバム『Get Up!』は、いずれも同じメンバー。ベースにエイブラハム・ラボリエル、ギターにフランク・ギャンバレ、ピアノにオトマロ・ルイーズ。その3人のとのコンビネーションが非常に良くて、この秋にも、もう一枚レコーディングを予定しています。夏場はもう13年やっている熱帯JAZZ楽団でジャズフェスやアルバム発表ツアーをします。秋はヨーロッパに行ったり。それからカシオペアの野呂さんがソロアルバムを出して、そのレコーディングとライブツアーを手伝ってます。秋にもミニツアーがあるようです。

■最後に読者のみなさんにアドバイスをお願いします。

●音楽は、音を楽しむと書きますよね。特にドラムは生きている喜びとかそういうポジティブなエネルギーを表現できる幸福な楽器だと思っています。ですから技術的向上も大事なんですが、まずは「叩いていて楽しい」という気持ちを大事して、演奏する歓びを感じられる演奏家であってほしいですね。もちろん練習するときはいろんな神経を使って、頭を使って、効率的に練習するべきなのですが、いったん人前で演奏をしたり、みんなで合奏する時はいったんそういうことを忘れてしまって、演奏する場と空気を楽しむ、それを大切にしてほしいと思います。

2008年04月01日発売　オープン価格 *NEW*

SILENT SESSION DRUM™
DTXTREME III スペシャルセットデビュー!

あのDTXTREMEIIIに、ゴージャスなセッティングの「スペシャルセット」が登場!

DTXTREMEIIIには、世界のトップドラマー:神保彰、トミー・アルドリッジのデモ曲を内蔵し、さらにデイヴ・ウェックル、ジョン・ロビンソン、ラス・ミラーといった錚々たるるドラマーのドラム・ソロが収録されています。また、練習曲としてDTXTREMEIIIのリアルな音色を生かしたデータも収録!

4タム/3シンバル/スネア/ハイハット/キックのゴージャスなセッティング、新開発のシンバル、ハイハット、キックは、さらにリアルな演奏感を実現。音源部の能力を最大限に発揮するパッド群と、それらを支えるHEXRACK。飛躍的に向上した機能が、究極なまでにプレイヤーの感性を表現し、グルーブを生み出します。